

# 「支援必要な子ここに」

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

38

### 第4部 支援の現場から <1>

「出たよー」。兄弟で入浴を済ませた小学生の弟が風呂場から裸で飛びだしてきた。「もう、パンツくらいはいてきてー」。女性支援員が悲鳴を上げる。

南風原町山川の民間教育施設、認定NPO法人「侍学園スクオーラ・今人」沖縄校で5月中旬、子どもたちの夜の居場所づくりが始まった。小学生の兄弟は最初の利用者。宿題を終え、夕食前にシャワーを浴びた。入浴の習慣がない兄弟の生活を支援し、少しずつリズムを整えていく予定だ。

兄弟は母、20歳の姉、中学生の長兄の5人で町内のアパートで暮らす。昨年12月に母が病気で倒れた。現在も入院し、回復のためのリハビリ中だ。姉は高校卒業後ホテルに就職し、家族唯一の働き手だったが、家事と母の介護が重なったため仕方なく退職した。

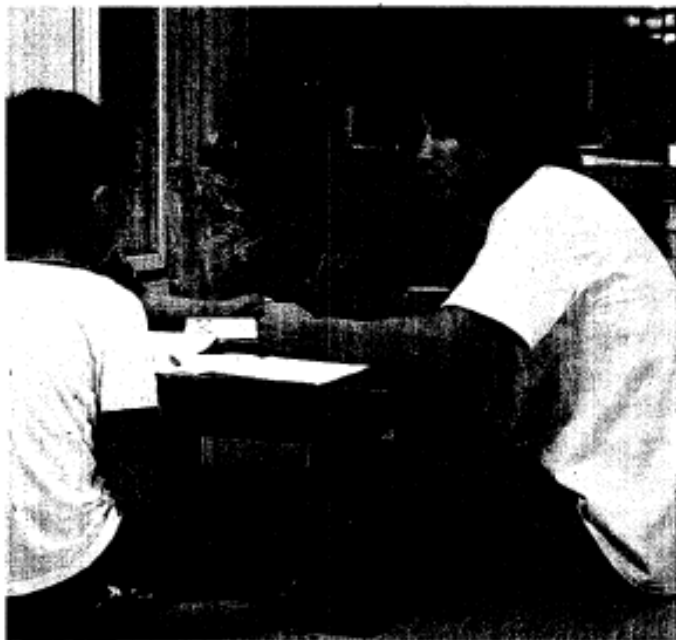
現在は生活保護を受けて暮らしている。姉は母の入院先に通いながら、弟3人の世話に追われていた。2年間不登校の状態が続く長兄の心配もあり、心休まる時間がない毎日だった。最近の生活について、姉は「気持ちの余裕がなくなっていてイライラしていた」と振り返る。「その日その日のことで精いっぱい。先のこととは考えられない」とため息をついた。

■ ■

小学生の弟2人は施設で学校の宿題、入浴、食事を済ませる。日ごろ、宿題を忘れてちで学校で怒られたり、居残り勉強を課されたりすることも多い。

## 南風原のNPO「侍学園」

# 夜の居場所 生活にリズム



夜の居場所子どもたちと共に過ごす暮目嶽さん(右)  
=南風原町山川

施設を運営する暮目嶽校長(36)は「放っておけば、いずれ非行に走る可能性が高い。何かを諦めてしまう前に、で

支援するわけではない。必要としている子がそこにいるからやる」。言葉に子どもたちと向き合う覚悟がにじむ。

南風原町の「子ども元氣ルーム」事業は夕方6時から夜10時まで、居場所と夕食を必要とする子どもたちに提供する。月々木曜日の「侍学園」と金曜日曜日の「キッズクラブ・カナカナ」。両方を合わせる週7日、切れ目のない支援ができる。県内初の自治体による「夜の居場所」だ。

弟たち3人の夜の居場所の受け入れが始まり、夕食の準備などの家事の負担が軽減された姉は「再就職の活動を始められる」と喜ぶ。「生活に追われて諦めかけていたが、調理師の免許取得に向け、もう一度頑張りたい。家族の暮らしを立て直したい」と意欲を取り戻した。

長兄も通数回、施設の夜の居場所に通う。高校進学に向けて学習支援を受ける。長く不登校だったが、4月から中学校に通い始めた。

町の前城充ことも課長は「町内に不登校・ひきこもりの恐れがある小中学生が約45人いる。できるだけ早い段階で二ノスを捉え、支援につなげたい」と説明する。

内閣府の「沖縄子供の貧困緊急対策」の予算を活用し、町は子ども元氣支援員2人を2016年度から採用した。二つの居場所での経験の積み重ねを通して、子ども支援の人材を育成していく方針だ。

(「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄)

29面に続く

# 普通の夜過ぐせる場

1面から続く

「いつもおうち帰ってからは何してる？」「んー、別に。9時から10時には寝るよー」そっか、けっこう早いな。南風原町山川の民間教育施設、認定NPO法人「博」学園スクオーラ・今人」沖縄校。民家を改造した3階建ての建物に子どもたちとスタッフの会話が響く。始まったばかりの夜の居場所。夕食を囲み、だんならんのひとときだ。

家庭の事情で夕食や居場所が必要な子どもたちのため、町が5月から始めた「子ども元氣ルーム」。町内の民間団体が運営する2施設と連携し、対象の子を利用料無料で支援する。

最初の利用者は母子家庭の3人兄弟。施設で2、3人のスタッフと学校の宿題、入浴、夕食を済ませて午後9時ごろ、送迎の車で帰宅する。

小学生の次兄と弟はこれまで宿題を忘れることが多く、そのたびに学校で叱られたり、居残り学習を課されたりした。その繰り返しで2人の自尊心や意欲が少なからず影響していた。

施設で宿題をするようになる

ここにいるよ  
沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から<1>



夜の居場所夕食を食べながら宿題をする子どもたちとスタッフの横井さん(中央)＝南風原町山川

## 共に宿題・夕食 子に変化

「しなくていい巻」もらったと無邪気に喜ぶ。

中学生の長兄は日によって来たり来なかったりという状態だが、無理やり連れてくることほしくない。友達と過ごす時間の大切さなども考慮し、スタッフとの信頼関係をつくりながら、少しずつ高校進学に向けた学習支援につなげていく方針だ。

施設を運営する横井さん「中学生のたまり場が必要なら、仲間も巻き込み、ここが安心できるたまり場になるようにしていきたい」と構想を語る。

今後、別の児童一人を受け入れる。家庭の事情で帰宅させられないことも想定されるため、宿泊にも対応できるように準備を進めている。テレビやゲームなども徐々にそろえる予定だ。

横井さんは「ほかの子にとっては当たり前、普通の夜を過ごさせてやるのが目的」と強調する。「この子たちを放っておけば成長するにつれ、よくない方向に行へるのは目に見えている。できることは限られているかもしれないが、はやり隣りに居させず、子どもたちの目標に立った支

援を長く続けていきたい」と語る。

利用する子どもたちの姉(20)が様子を見に来た夜、横井さんは弟たちに対し、姉の目「ろの頑張り褒めた。

「いつも」飯作ってくれるの誰だ？」「洗濯は？」「宿題みてくれるのは？」。矢継ぎ早の質問に、弟たちはその都度「姉ちゃん」と答えた。

「すげーな。姉ちゃん、何人いるんだってくらい、忙しいな。ぶっさらぼうだが温かい言葉。」たまには手伝うか。横井さんの呼び掛けに、弟たちは照れながらもなげうた。

「弟たちの世話をしてみらえることで、自分も再就職の活動ができる。調理師になる夢を諦めかけていたけど、もう一度追いかけてい」。姉は目を潤ませて笑った。

(子ども貧困)取材班・田嶋正雄 随時掲載